本願寺新報
hongwanji journal
2月1日(土曜日)
毎月1日・10日・20日発行
発行所　本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル　浄土真宗本願寺派（西本願寺）
〒600-8501　本願寺出版社内
電話 075(371)4171(代) ／ FAX075(341)7753

くるまのことなら
株式会社 平安オート
国産車・輸入車の販売・買取、車検、鈑金、塗装、保険代理店
■自動車販売・買取については 販売センター TEL:075-661-2572
■車検・修理については フロント・整備工場 TEL:075-661-0750

トップニュース

阪神・淡路大震災30年特集　中学3年生が見た〝あの日〟

「震災と『歎異抄』の言葉 重なる」

兵庫県西宮市・善教寺　赤井智顕さん

1995年1月17日に発生し、死者6434人など甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災から30年が経った。この日、兵庫県西宮市の善教寺を訪ね、当時中学3年生だった副住職の赤井智顕さん(44)にこれまでの歩みを聞いた。また、同日午後に神戸市の神戸別院で営まれた物故者総追悼法要では、震災後に生まれた宗門校の生徒・学生5人が地元の復興や防災への思いを綴った作文を朗読した。

阪神甲子園球場にほど近い住宅地に建つ善教寺。特徴的な屋根組みの山門をくぐると、鉄筋造り2階建ての会館と木造の庫裏にはさまれ、駐車場が広がる。

「ここに本堂があった」。赤井さんは、アスファルト敷きの駐車場を指さした。震度7を記録したあの震災で築300年の本堂と山門、鐘楼を失った。

「本堂は30度近く傾き、倒壊寸前。取り壊さざるを得なかった。この山門は解体した本堂の柱や梁を再利用して建て直したもの。だから屋根の形がちょっと変わっている」と続ける。30年を経たが、本堂はまだ再建できていない。

あの日。午前5時46分。中学3年生だった赤井さんは自室の布団の中にいた。6人家族で両親、祖母、高校3年の姉、小学4年の弟はそれぞれの部屋で寝ていた。

不意に、身体が浮き上がるような「ドンッ」という衝撃に襲われ、飛び起きた。夜明け前で辺りは真っ暗。グラグラと揺れる。けたたましい音。ドタンドタンと物が倒れる音がする。夢とも現実ともつかない時間がどれだけ続いたのか。やがて廊下を走ってくる足音がして、懐中電灯の明かりに照らされた。

「すぐに両親が来てくれた。あの揺れの中を助けに来てくれた。2人の顔を見て『助かった』と思った」

日が差し始めて明るくなった室内を見ると、本棚や学習机が折り重なるように倒れていた。「きょうだい3人とも背の高いロフト式のベッドだったので助かった。低い所で寝ていたら下敷きになり、おそらく命はなかったと思う。生き死にを分ける経験だった」。

近隣の建物も大きな被害を受けていた。水道・電気・ガスは不通。庫裏も半壊状態で、赤井さんの家族は、被害の少なかった、少し前まで保育園の園舎だった境内の会館に家財を運び込み、寝泊まりした。

カセットコンロや懐中電灯を頼りに日々の生活を送り、何日も風呂に入れなかったこと。避難所になっている学校に救援物資を受け取りに行ったり、宗派の関係者が何人も片付けのボランティアに来てくれたことも覚えているが、どれも記憶は断片的だ。

生活は一変。学校にも行けず、友だちとも会えない。気持ちの整理が追いついていなかった。「鮮明に覚えているのは会館の中でずっと勉強していたこと。受験生ということもあったが、何かに意識を向けないと不安ばかりが募ってくる。机に向かっている時間だけはつらい現実を少しだけ忘れることができた」。

大災害の中、14歳の少年にできることは限られていた。「もし、あの時私がもう少し大人だったら。もっと誰かの力になれたかもしれない」。同寺では市内の門徒5人が亡くなった。火葬場が使えず、大阪まで搬送して8日後にようやく葬儀ができた方もいたと後に聞いた。

◇

地震から3年後に龍谷大学（京都市、宗門校）に入学し、講義で『歎異抄』に触れた。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもってそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」（註釈版聖典853ページ）の一節に目が止まった。

「震災の経験と重なった。厳しい言葉だが、この世の物事は当てにならない『そらごと』と言い切っていく。そして、何が本当に壊れないものかということが示されている。時代や場所が変わっても変わらない、『本当のこと』がある。それがお念仏だと教わった。このことを学び、伝えていくことが、震災を経験し、僧侶として生きていく自分の役割だと思った。『ご縁』にもいろいろあると思うが、あの経験がなければ、今の僧侶としての私はなかったと感じる」

写真上＝駐車場となっている場所に本堂があった。右は半壊した後に修理された庫裏、左は倒壊を免れた旧保育園舎
写真左＝倒壊した本堂などの木材を再利用して建てられた山門

「机に向かっている時間だけは現実を忘れられた」

「門徒の復興が先」共に歩む父の思い

震災から30年。父・秀顕住職(81)を支えながら、宗門校・相愛大学（大阪市）の非常勤講師や布教使として活躍する。2児の父となり、当時の両親と同じ年代になった。

「本堂再建の話はずっとあり、ご門徒の中にも『すぐにでも』と望む声はあった。しかし、父には『復興の歩みは人それぞれだが、ご門徒の復興が先。本堂の再建はそれからでいい』という思いがあった。両親は震災直後のつらい時期もずっと普段と変わらない姿でお寺と家族を守ってくれた。子として僧侶として、あらためて感じるところは大きい」と赤井さん。

近く、いよいよ本堂の再建にかかる予定だという。

「父にも私にも本堂再建は悲願だが、大切なのは形ではなく、そこで何を伝えるか。私にとって、復興と伝道は一つの歩み。ゴールではなく、スタートという気持ちで前に進んでいきたい」と熱の込もったまなざしで穏やかに語った。

生徒らが受け継ぐ「震災」作文に

神戸別院　1月17日に大震災物故者総追悼法要

1月17日の午後、神戸別院で「阪神・淡路大震災物故者総追悼法要」が営まれ、兵庫教区内の僧侶や門信徒110人が震災30年の節目に手を合わせた。

おつとめに続いて、兵庫県内の宗門校（神戸龍谷中学、神戸国際中学、神戸龍谷高校、兵庫大学附属須磨ノ浦高校、兵庫大学）の生徒・学生の代表5人が、震災に寄せて綴った作文を朗読した（写真）。

震災当時に被災した人の救助に当たったという父親の話を作文にした兵庫大4年の櫻井愛子さんは「父は瓦礫の下に埋もれていた人をひとり助け出しましたが、すでに亡くなっていたそうです。29年前の話をする父の表情には、心なしかやるせない悲しみを見た気がしました。その父の悲しみは、たくさんの尊い命を奪った自然の脅威に対してどうすることもできなかった人間の無力さであったのだと思います」と思いを寄せた。

いずれも震災を直接経験していない若者たちは、学校で受けてきた防災教育や頻発する自然災害に触れながら、備えの大切さなどを訴えた。

法要に参拝した兵庫県尼崎市・専正寺門徒推進員の西田瑛子さん(87)は「神戸別院にはいつもお参りするが、この法要は初めて。30年の節目という特別な思いで参拝した。専正寺さんが大きく被災してご住職が苦労される姿や全国の推進員仲間が支援してくださったことを思い出した。もう30年も経ったのかという思い」と感想を寄せた。

また、法要後の「1・17いのちを考える研修会」では、ラジオ司会者などで知られる浜村淳さんが「いのち明るく」と題し、講演した。

主催は同別院と「御同朋の社会をめざす運動」兵庫教区委員会。震災の犠牲者を悼み、いのちの尊さや自然災害の恐ろしさを後世に語り継ぐため、震災の翌年から物故者総追悼法要と同研修会をこの日に行っている。

新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）

南無阿弥陀仏
「われにまかせよ　そのまま救う」の　弥陀のよび声
私の煩悩と仏のさとりは　本来一つゆえ
「そのまま救う」が　弥陀のよび声
ありがとう　といただいて
この愚身をまかす　このままで
救い取られる　自然の浄土
仏恩報謝の　お念仏

これもひとえに
宗祖親鸞聖人と
法灯を伝承された　歴代宗主の
尊いお導きに　よるものです

み教えを依りどころに生きる者　となり
少しずつ　執われの心を　離れます
生かされていることに　感謝して
むさぼり　いかりに　流されず
穏やかな顔と　優しい言葉
喜びも　悲しみも　分かち合い
日々に　精一杯　つとめます

赤光白光

「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく」。『古今和歌集』に小野篁の歌としてみられる。花が雪に紛れて見えないとしても香りだけは匂ってほしいものだ、という心に読み取れる。梅の花だと思われるが、花と香りは一つのもので切り離すことはできない。見えなくても香りから花の姿を思い浮かべることができる。

▼香りと姿で言えば、「姿より香りに生きる花もある」という言葉もある。外形だけで判断してはならないことを示すことばともとれる。秋に咲く金木犀の花はどこかひかえめだが、香りは別名九里香と言われるほど、よい香りを遠くまで放っている。「香りに生きる」ということばもどこか、宗教的な生き方を想起させる。

▼よい香りのする栴檀。木は枯れてもそこかしこに香りを漂わせていることから「栴檀の枯れても残る香りかな」。亡き人を偲ぶときに用いることがある。「香り」ということばそのものが心を癒やし、心落ちつかせてくれる雰囲気が宿されているようだ。

▼親鸞聖人は「香り」を和讃に詠まれている。「染香人のその身には　香気あるがごとくなり　これをすなはちなづけてぞ　香光荘厳とまうすなる」。仏の智慧に染まった人、すなわち念仏者は芳しい香りにつつまれて、安らぎと心なごむ雰囲気を感じとることができる、と詠われている。「昔、広島地方では、念仏者には独特の香りがあると言われていた」という先輩のことばを、雪の朝に思い出した。

● 華遇記 …… 藤井 真
● DAIJO法話 …… 川添 泰信
● ご機言！お寺の掲示板 …… 江田 智昭
● 結婚してお坊さんになりました …… 前田 純代
● なるほど仏教ライフ … 西原 祐治
● 御文章をいただく … 満井 秀城
● みのりのエッセー … 巌后 顯範
● ほうわ・HOWA・法話 …… 佐藤 知水
● 仏教壮年の声
―― その他コーナー多数！

ブディストマガジン 大乗 DAIJO 2月号
本日発売！
毎月1日発行
B5判／80ページ
年間購読料 4,500円（税・送料込）
1冊 375円（税・送料込）
本願寺出版社
0120-464-583
FAX 075-341-7753
〒600-8501
京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺)
https://hongwanji-shuppan.com/

最新刊　善導大師の「自信教人信」のおこころを仰ぐ
「帰三宝偈」のこころ
〔訳〕豊原大成（本願寺派元総長）　〔解説〕赤井智顕（相愛大学講師）　発行：聞真会
葬儀の際に用いられる善導大師『観経疏』冒頭のこの偈文には、何が説かれているのか。意訳と解説により、大師渾身のその言葉を味わう。本派「出棺勤行」の偈文・短念仏・回向句を掲載。おつとめや学習会にも好適。
B6判・並製・72頁　660円

新刊　和歌から読み解く、平安貴族たちの偽らざる心
平安貴族の和歌に込めた思い 続
〜桓武天皇・在原業平・藤原頼通・紀貫之・菅原孝標女・待賢門院堀河・藤原忠通・平忠盛〜
今井雅晴（筑波大学名誉教授）
B6判・並製・184頁　1980円

＊価格はすべて税込　＊送料・発送手数料：ご注文合計6,600円未満＝一律400円、6,600円以上＝無料
合同会社 自照社
ホームページ：https://jishosha.shop-pro.jp
【赤井智顕 師 書き下ろしコラム配信中!!】
滋賀県大津市日吉台4-3-7　電話：077-507-8209　FAX：077-507-9926

御本山御用達　開明社員
井筒法衣店
代表取締役社長　今岡規代
●本社
600-8468
京都市下京区堀川通
新花屋町角（西本願寺前）
Tel 075-351-1234
0120-075-720
Fax 075-341-7905
●東京店
160-0008
東京都新宿区四谷
三栄町十四番地三一
Tel 03-3358-1500
Fax 03-3359-8902
オンラインショップは こちらから

浄土真宗本願寺派 傷害・医療保険
あんのん医療保険
団体割引 30%
（新・団体医療保険（医療保険基本特約・疾病保険特約セット団体総合保険）・傷害総合保険）
【加入対象者】浄土真宗本願寺派の住職・僧侶・寺族・門徒およびその家族
病気やケガによる入院や手術等を幅広く補償。（天災によるケガも対象）
◆1日5,000円プランより　◆入院1日目より補償
★新規加入は満79歳まで、継続加入は満89歳まで拡大
介護・がん のリスクにも対応!!
介護特約　要介護2以上の認定、または保険会社所定の要介護状態が90日を超え継続した場合に、一時金で100〜300万円を補償
がん特約　がん診断一時金　がん通院治療費用 にかかる特約もセット可能
この広告は概要を説明したものです。詳しくは下記取扱代理店までお問い合わせください。引受保険会社損害保険ジャパン株式会社　SJ24-10332（2024.11.14作成）
フリーコール 0120-37-0243
https://www.purani-hongwanjihahoken.com
＜取扱代理店＞
浄土真宗本願寺派提携代理店 株式会社 プラニ
【代理店所在地】〒600-8109 京都市下京区五条通西洞院西入平屋町420RMビル3F
ホームページ